

<その21>

日が暮れて、凜と俺はクルマの中まどろんでいた。

クルマは町田市が多摩丘陵の、開発がまだされていない<奥地>、木立の陰一

「昔太宰さんのこと、ちょっとだけ調べて、いわゆる『無頼派』の友人だった坂口安吾の、太宰の死を受けて書いた『不良少年とキリスト』を読んだことがあったんだ。」

俺は囁いた。

凜が俺の方へ顔を向けたようだった。

「そこで坂口さんは、太宰はローレイにしてやられた、とかつて書いていたよ。」

「Loreley?」

凜がまたもや、そして今度はドイツ語を、美しく発音した。

「な〜じかは知〜らね〜ど、の。」

「あ〜、Ich weiß nicht, was soll es bedeuten, daß ich so traurig bin  
ね。」

「ハイネの詩なんですよ。訳した日本人、原詩をできる限り忠実に映していて立派だ  
なって思ったなあ。『なじかは知らねど、心侘びて』。ほら、漫画の原作を実写化す  
るときに脚本家が無体にも改変して原作者を致命的に悲しませるってことがある  
じゃない。だからこの『ローレイ』の日本語訳者、え〜と・・・。」

「近藤朔風ってあるわ。」

凜が Wiki を読んでいる。

「そう・・・近藤朔風。」

「Goethe の『野薔薇』も訳しているみたい。」

「ああ、Sah ein Knab' ein Roslein stehn, Roslein auf der Heiden!」

「Schubert 版。ユウさん、なかなかの発音ね。それにさすがは singer、うまい。」

「童は見いたあり、野中のばーらっ。」

凜はクスクスと笑った。

「なにしろー」

「出たあ。」

凜がまた笑った。今度はキャッキヤと。

「なにしろねー」

俺も楽しく続けた。

「太宰さんはローレイにやられたって。ローレイは『ささやく岩』って意味なん

だよ、確か。ライン川の難所で、突き出た岩山、そこに船乗りたちを誘惑、temptし、結局〈転覆〉など水難に導く妖精ありつて。」

凜は今度はギャハハと笑った。

「坂口安吾さんは、そのローレライは太宰さんにとって酒だった、と。もちろん心中相手の方のささやきも重ねてはいるんだろうけれど。凜にとっては、太宰さんがくさやく紫陽花〉になったってガ。」

「貫入場所はDTにとってはどこでもいいんでしょうけれどー」

と凜が言った。

「やはり、自分がDTになる前のゆかりの場所に求めるものなのかしらね。」

「そこを通る誰か、〈波長〉が合って、さらにいろいろな理由で4Dの世界により高次の世界から貫入して何かしら働きかけをせざるを得ない、あるいはそうしたい誰か・・・それが凜だったんだろうね。」

凜が体勢を直す音が聞こえた。

「あのときー」

凜が吐息混じりに言った。

「私はあの時確かに創作に行き詰まっていた。傑作をものしたいという意欲が、強迫観念っぽいものになってしまっていたと思うわ。肝心なのは自分が納得できるかということなのに、他者の評価ばかりを気にしていたの。今になれば愚かなことだって簡単に分かることだったのに、気づけなかった。自分で納得できて、かつ、他者も評価してくれる作品をどうしても産み出さなきゃって。」

「そりゃあそうだよ。」

俺は応えた。

「自分の納得だけだったら、それこそ『風の便り』の井原が言う、〈心境未だし、ひとり合点なり、きめ荒し、生活無し、不遜なり、思想不鮮明なり、俗の野心つよし、にせものなり、自己陶醉に過ぎず、衝気、おつちよこちよい、気障なり、ほら吹きなり、のほほんなり〉辺りを言われてしまうのがオチだもんね。それでも、それでもだよ、自分が納得できるかが決定的だよ。だから自分の藝術的基準を絶えず押し上げていかねばならない。」

「そうなの。」

凜は顔を窓外に向けたようだった。

「だからね、特に『生活なし』のところで、私は生きなければいけないって思ったの。まず私は経済的心配がない立場だった。いわゆる漱石の謂う『高等遊民』。生活感な

んてまず皆無だった。だから、私のことば、私の作品に、まるでヒッグス粒子みたいに質量を与える〈経験〉が必要なんだって。」

「生活苦もあるかもだけど、恋愛のことかい、さっきの話から言うと。」

と俺は応じ、さらに続けたー

「ヒッグス粒子のような質量を与えるもの。でもさ、質量って〈動きにくさ〉なんだよね。人生経験、恋愛経験で、もしかすると自分を雁字搦めにしてしまうのかも。子ども、特に幼児の絵がすばらしいって思うとき、それは経験が限りなくゼロに近いからじゃないかって思うんだ。〈さかしら〉がないから、とも言えるかな。そんなのすばらしくないって言う中島義道さんや山田詠美さんみたいな人もいるけど。二人は動きにくさの中での思想や表現こそって思っているのかな。だとしたらマゾヒスティックだね。」

凜が俺を見つめているのを感じた。

さらに俺は続けたー

「この世の成り立ちにとってヒッグス粒子のおかげっていうのはあるんだろう。それどころかその粒子がなきゃ成り立たないっていうぐらいのもんなんだろう、俺はよくわからんけどね。ところでさ、凜、この世で、ヒッグス粒子が働かない、動きにくさ=質量がゼロのものって何だか知ってる？」

凜は少し黙っていたが、

「光ね」

と答えた。

ずっと低音量で流している俺「お気に入り」のポップスは、ちょっと前まで Burt Bacharach 作曲、Christopher Cross 歌の Arthur's Theme だったが、そのときは Beatles の The Word になっていた。

<その 22>

「Nigel のことだけどー」

俺は少し躊躇はしたが、切り出した。

「驚きね。」

凜が、脈絡なく、そう言った。

俺はカーステレオの音量を下げた。

「何が？」

「さっき Burt Bacharach の曲がかかっていたでしょう。」

「うん。」

「Bacharach って、まずその Loreley の在るところって言っているのよ。世界遺産のライン渓谷中流上部の都市。」

「え？地名だったの？」

「私、行ったことがあるの。」

「・・・Nigel と？」

「そう。」

凜は重苦しそうに返事をした。

「私が Nigel と最初に会ったのは、先日言った通り、ロンドンで母と暮らしていた頃、およそ 20 年前のこと、つまり一旦日本に戻っていて、私が玉川上水で DT に出会って、後に再び渡英してすぐのことよ。再びって言うのは、私はイギリスで大学を出ているの。Cambridge の Faculty of Modern and Medieval Languages and Linguistics で、言語学が専攻だった。

ミュージシャンとして、私はピアノを弾き、歌も唄ったけれど、フロントに立つより作詞作曲家として生きていければって願っていたの。特に作詞家としてね。

前に話したカムデンでの gig で Nigel の音楽に魅せられた私は彼と付き合うことになったの。彼は自身がウェールズ人だと言っていたけれど、母方の曾祖父がドイツ出身だったって。初めて二人で旅行するということになって、彼はバツハラツハ (Bacharach) を中心にライン川を見たい、Loreley の岩山を見たい、というのもその曾祖父の家は元々バツハラツハに在ったという話をお母様から聞いていたからなのね。

ガイドブックを見ながら、そして地元にあった歴史館のパンフレットを読みながらバツハラツハを歩いていると、段々 Nigel の様子がおかしくなってきたの。何かブツブツ言ったり、首を小刻みに左右に振ったり。

ヴェルナー礼拝堂 (Wernerkapelle) という 13 世紀に起きたある事件の犠牲者を祀った Kapelle の廃墟前に来ると、彼は <壊れた> の。」

「壊れた？」

俺は聞き返した。

「ええ。半狂乱になって、あの自分の歌、The Plotter を歌い出し、そして、

Blessed are those who believe without seeing me!

(我を見ることなく信ずる者こそ幸いあれ！)

って、John (ヨハネ) の 24 章 29 節のことばを叫びにして倒れたのよ。」

「つまり、自分の歌の歌詞 Whoever calls on the name of MINE shall be

saved を歌って、そのヨハネの一節を叫び、倒れた？」

「そう。復活を遂げた Jesus を信じない Thomas が、やっと Jesus を眼前にして信じたー

そのことを訓戒することばだわ。」

「でもなぜ、Nigel はそんな風になったの？」

「それを話し出すと長くなるわ。私の家か、ユウの家か、どちらかで続けましょう。」  
俺はどちらにするかは決めぬまま、「わかった」と言い、エンジンをかけた。

<その 23>

どちらの家へ行くかは、結局先に着く方ということになった。

普通の道順で行けば、町田市の多摩丘陵地区からは成城2丁目の方がほんの少しだけ近かった。

凜の豪邸にはクルマが3台駐められる。車庫にあったのは1台だけ。白い Mini だった。

「愛車？」

「ええ。世田谷を走るのには小さいのが best だから。」

クルマを降りて、駐車場から前庭に出た。

「あの数寄屋風の格子戸、通りたかったなあ。」

俺がそう言うと、「セコム解除したからいいわよ」と凜。

俺は格子戸を内側から開け、一旦外に出て、慎ましい感じでところどころ照明が施されている豪邸を正面から眺め、また格子戸の玄関から入って前庭のアプローチへ。凜が玄関のところで俺をにこやかに見ていた。

「すごい家だなあ。」

俺は広い上がり框のところで嘆声を上げた。

「和洋折衷ぶりが絶妙だ。品がいい。」

「父母の趣味よ。私も好き。」

凜はそう言って、俺のためのスリッパをきちんと揃えて上り口に置いてくれた。

俺はそれを履くや否や凜を抱きしめた。凜も強く抱き返してくれた。

俺は熱情が冷めぬまま、ちょっとフラつきつつリビングに入ると、「何十畳あるんだ、ここは！」と凜には聞こえないように言い、絶句した。家具の趣味のいい配置、照明

具合、すべてが classy としか言いようがない。奥の方はダイニングルームに接続していて、カウンターキッチンが見える。

「お昼に食べてからだいぶ経つわね。何か食べたいものがあれば作りましょうか。」

凜が訊いた。

「いや、そりゃ手間だろう。」

俺がそう言うと、

「朝に作っておいた stew があるわ。それとバゲットでいい？」

俺は一瞬、凜は俺がここに来ることになると想っていた、あるいはそうするよう導くつもりだったのかと思ったが、もちろん口は出さなかった。

「最高じゃん。ただ、まだいいよ。さっきの話、まず聴きたいな。」

凜が「Earl Grey 飲める？」と俺に訊いて、俺はまたアホみたいに「最高じゃん」と答えた。＜遠くに見える＞キッチンにいる凜を見つつ、俺はダイニングのテーブルへと移動した。凜のことをずっと見つめている。夢じゃないのかと思わざるを得ないような時間だった。

カップをテーブルに置いて、

「ユウはブログで synchronicity のことも書いていたし、なんら不思議は感じていないでしょう？」

と凜が言った。

「え？」

「ユウが話してくれた坂口安吾の太宰自死について書いたものにローレイが出てくる…そしてクルマの中では Burt Bacharach の歌が流れ、私が話すつもりだった、あるいは、話さねばならない Nigel とのドイツ・ラインラントのバツハラッハ、ローレイでの思い出、出来事が、同時的につながっているのよ。」

「そ、そうだね。」

俺はそう応じて、Earl Grey の香りを嗅ぎつつ、波立ち始めた心を無意識に静めようとした。

凜はしばらく Earl Grey を飲みながら黙っていたが、

「私ね、半狂乱の Nigel に言ったの、言い聞かせたのー

(For) if anyone thinks himself to be something, when he is nothing, he deceives himself.

(何者でもない者なのに、己を一廉の者だと見做すなら、彼は己を欺いているのだ。)

これは『ガラテアの信徒への手紙』6章3節のことだよ。そして、『For each

one shall bear his own load、おのおのが己の重荷を背負うのだ』という5節も彼に浴びせるように言ったわ。すると彼は電撃に打たれたようになって、ヘナヘナと跪いたのよ。

最後に私は、同じく9節、『And let us not grow weary while doing good, for in due season, we shall reap if we do not lose heart. (善を行いながら弛むこと勿れ、心失わずいれば、時が来て、実を刈り入れられるがゆえ)』と彼に語りかけたの。」

「そしたら？」

「Nigelは泣き出したわ。俺には見えた、はっきり見えたって言って。」

「うん？」

「『俺が傲慢で自惚れていたわけが』と。」

#### <その24>

「彼はステージで、『I'm love. I'm love itself.』とも言っていたのよ。自分の名を呼ぶ者は救われると言っていた彼は、自分は愛、愛そのものだ、とも。もしかすると自分は Messiah (救世主) とでも思っているんじゃないかって疑ったわ。私が彼と付き合うようになって、確かに彼は事あるごとに愛だ、平和だって歌っていたわ。過激な歌詞の曲でも、最後は愛を説いた。でもそれは彼の渴望だったのよ。」

「なるほど。そのことから Hannah Lynn が All You Need Is Love の『Love』は抽象名詞ではなくて、原形不定詞だと、つまり『愛』ではなくて『愛すること』だという信念を俺に教えてくれたわけだね。愛を口にするなら、現に愛することを行う者であれ、と。」

凜は、

「Hannah Lynn て呼ばれるの、好き」  
と言った。

「これからもそう呼んで、できるだけ。」

俺は彼女の手を握った。

「Hannah はヘブライ語で、英語では graciousness (雅さ) あるいは grace なんだろう？」

「調べたの？」

「ああ。Etymology (語源学) が大好きだから。」

「より Anglican (英国国教会ないし聖公会的) なら Ann や Anna なのでしょうけれど。」

「Hannah はすてきだよ。チャップリンの『独裁者』の最ラストシーンで、絶望の淵でナチに迫害されるユダヤ人同士の恋人の演説によって再び希望を持ち、立ち上がろうとする女性が Hannah だったね。」

俺は Hanna Lynn の手の甲を撫でながら、続けたー

「しかしね、ヘブライ語、旧約聖書世界を、キリスト教もイスラム教も認めている、あるいはそれらの教えの基盤にしているのに、なんでユダヤ人迫害とか、3宗教間の対立が起こるんだろうって中学生の頃くらいまでは思ったもんだ。でも対立なんて、仏教諸宗派にだってあるし、もっと言えば親子にだってあるんだから。近親憎悪的なものっていうか。」

「Nigel はねー」

凜が声を震わせた。

「ヴェルナー礼拝堂で、それこそ『神の声』を聞いたのだそうよ。

<お前の祖先はここバツハラッハでヴェルナーを殺害したユダヤ人を殲滅するポグロムに主導的に関わった。そして 1920 年代、その末裔はハンブルグで船乗りをしていた。彼は結成されたばかりのナチの熱心な支持者となっていた。

その頃彼は停泊地イングランドの港町リヴァプールである女と懇ろになった。その女はユダヤ人だった。二人に生まれた女兒は Hannah と名付けられ主に母親にリヴァプールで育てられたが、船乗りの父はある日を境に全く帰って来なくなり、女も育児を放棄し、Hannah は Strawberry Field という名の孤児院に収容され、後、大人になって 1940 年にウェールズ人 Samuel Evans と結婚する。

すぐに男児が生まれる。しかし Samuel は間もなく徴兵され、ナチと戦ってドイツ領に侵攻、ところがここバツハラッハでシュタールエック城の高みからドイツ狙撃兵に撃たれ、戦死するのだ。お前の父親 David Evans は、その Samuel Evans と Hannah Epstein の息子だったのだ> と。」

俺は口をポカンと開けて聴いていた。

Nigel の父の生い立ち、John Lennon のそれに似ている。

しかも、Strawberry Field は John の家からほど近い。

「Nigel が『はつきり見えた』と言ったのは、その<神の声>が語る Evans 家の歴史が頭の中ではつきりと映像化されていたってということだと思うの。

彼は汎神論者だった。ケルトの一派である Wales 人、いいえ、彼ら自らの呼称である Cymru 人としての誇りに目覚め、キリスト教やユダヤ教を茶化していたの。私に

興味を持ったのも、日本が八百万の神の国だとどこかで知ったから、仏教という三大宗教も広く信じられているのに、神道という汎神論的土着宗教とどう共存しているのかを知りたかったからというのもあったらしいわ。」

「いや、なにしろただただ Hannah Lynn が魅力的だったからだよ。」

俺は苦々しい口調で言った。

凜は苦笑した。

「彼はほぼ純粋 Cymru 人だと信じていたの。Evans という家名はウェールズでは日本の鈴木や佐藤、田中に当たるほどポピュラーなものだしね。ケルトと言えば、アイルランドやスコットランドをまず連想する人が多い中、ウェールズ、Cymru ここに在り、という気概で彼はギターを弾き、歌っていたのよ。日本の天台本覚論でいう『山川草木国土悉皆成仏』、だれにも、どんなものにも仏が宿るという思想が、Cymru 人の自分にとってはその『仏』を神や妖精に置き換えるだけ—その親近感を彼はよく私に訴えたものよ。」

俺は嫉妬心を覚えながら聴いていたが、この長い話のまとめに入った—

「ところが、なんと自分にはユダヤ人の血も、そしてそのユダヤ人をポグロムやホロコーストで迫害、殲滅しようとしたドイツ人の血も、しかもバツハラッハで現にユダヤ人コミュニティーを壊滅させた人の血も受け継いでいたなんてと彼は半狂乱になるほどショックだったということなんだね。

でも、いいじゃないか、Cymru 人、ウェールズ人で汎神論の愛至上主義者だと自分が思うなら、先祖がどうだった、なにをしたとか、関係ない。俺だって、2 の n 乗で、例えば n=4 とかになったら、その 16 人の先祖のそれぞれが誰でどんなことをしたかなんて全くわからん馬の骨だ。

ただ、まあ、Nigel 君、いくらロック音楽の自由な表現だとしても、自分を Messiah みたいに言うてはいけなかったよね。どんなに汎神論こそが地球を救うと思ひ、その普及のため自分はリーダーになるんだと確信していてもね。」

凜はしばらく黙っていた。

そして、

「Call me Hannah Lynn, again」

と言った。

<その 25>

俺は「Hannah Lynn」と凜のリクエストに応じて呼び、

「Nigel のおばあさんも Hannah という名前だったんだね。」

ポツリと言った。

「それも私に関心を持った大きな理由だったみたい。」

「関心……。」

俺は気を取り直し、できるだけ明るめな声調で、

「で、ふれあい広場下の Nigel との話し合いというのは？」

と訊いた。

凜は、Earl Grey ではなく今度は無糖のキャラメル・ティーにするがどうかと俺に尋ねる。俺は Earl Grey のままがいいと返事して、彼女はキッチンへ歩いて行く。

帰ってきて、カップをテーブルにふたつ置き、凜は、

「やり直したいって話だったわ」

と言い、キャラメル・ティーをひと口音を立てず啜った。

「バツハラッハのことがあって、Nigel は音楽家として、人間として、一皮剥けたの。そう、その時は思えたの。汎神論は自然の保全にもつながり、ecological な姿勢で、まさに環境音楽というべきジャンルに入って行ったわ。間もなく私は彼と結婚したの。新居は母の Chelsea の家の近くのフラット。

その5年ほど後、彼は北欧の環境保護団体の招きでストックホルムで演奏をしたの。私はついて行かなかったのね、所用があつて。そして彼はあちらで恋をしたのよ。お定まりと言っていいのか、ブロンドの長身女性と。その女性も汎神論者で、ランドヴェーッティルという山川草木に棲む精霊の存在を信じていてね。彼はコンサートが終わっても、アイスランドを含む北欧をその女性と旅して、数ヶ月も帰って来なかった。私には音楽のモチーフを探す旅だとか言つて。まあ、それは嘘ではなかったのだけれど。」

凜は苦々しく笑った。

.. ..

「彼に恋人がいるのを知ったのは、なんと、その女性、Mia というのだけれど、その Mia が、私が父母と南仏に行っている間に Nigel に連れられ私たちの家に来て、なんと、しばらく二人は一緒に暮らしていたのよ。私が南仏滞在中 Cambridge の大学院の先生にあることで呼ばれて、さらに父母二人きりにするのもいい案だと考えて、予定より早くロンドンに戻って発覚したことよ。Nigel には家に置き手紙をしておいて、彼はそこに書いてある私の帰国予定日前までなら Mia と一緒にいられるって思ったのね。

まあ、鉢合わせした時の阿鼻叫喚は想像に難くないでしょ？まるで私は、ある日突然我が家で Yoko Ono が屈託なく John と一緒にいるのを目撃した Cynthia だったわ。私は Nigel のどんな言い訳も聞かなかつた。すぐに別れたわ。そして私は日本の聖公会系 L 国際大学に非常勤で職を得て、成城へ戻ってきたのだけれど、父が

その後亡くなり、母は再婚してロンドンにそのまま暮らし、その母も3年前亡くなった。ロンドンと東京の行き来は終わり、成城の家だけに住むようになったの。

Nigel はきっと母の葬儀で私の親戚か誰かからこの成城の家のことを聞いたのね、3年前の、そうちょうど今頃ね、突然私を訪ねてきたの。簡単に言えば、復縁を迫ってきたの。」

「しょーもねー野郎だな・・・おっと失礼、言葉が汚い。」

俺は心底腹が立っていた。

「Swedish girl とはどうなったの？飽きたか。」

「きっとその子とも another girl ができてとつくと別れていたんじゃないのかしら。

Another girl who will love me till the end

Through thick and thin she will always be my friend

って感じ。Paul McCartney の歌そのもの。」

「『Till the end』って、ハハ。」

俺は嘲笑した。

「『Till I die』じゃないところがミソだよね。Paul もそう歌詞を書いて笑っていたはず。この『最後まで』は<関係が終わるまで>って解釈できる。その関係を終わらせるのは、Paul なんだ。」

凜は「笑えないわ」と言って、それでも笑った。

「Nigel は結局アーティストとしても行き詰まっていて、私と復縁できたら東京を中心に音楽活動をしたい、『大昔の Queen のようにまず日本で認められて世界へ』みたいなことを言ってね。もちろん私の財産も当てにしていたんだと思う。一体バツハラツハの体験は何だったのか。つくづく私は人を見る目がなかったと思い知らされたわ。

一方的な望みばかり、あの蚊が出るベンチで語ってね。そう、彼は汎神論の補強だとか言って、熊野古道を歩いてみたいとか言って、私を誘うのよ。なんでも神仏混淆だか、山伏になって理趣経の真髓を熊野の山々を駆け巡って知りたいとか言って、まったくー」

「おいおい！」

俺は思わず語気荒く凜の話を遮った。

「熊野様のことになっちまうと、俺は黙ってられねえぜ・・・ごめん、言葉がまた・・・。しかしね、冗談じゃないよ。Nigel の口から出まかせの続きに熊野様が出てくるなんて。」

「でもね、そのときなのよ、思い出したわ、今！」

凜が目を見張るようにして言った。

近くの紫陽花の根本あたりから声がしたの、私にだけ聞こえる。

「紀伊・熊野との縁は、後に現れる男との縁が結ばれるまで探ってはならぬ、つて。

そう、そう聞こえたのよ！不思議、どうしてそのことを忘れていたのかしら！」

俺はゴクリと唾を呑んだ。

「それって・・・俺のこと？」

「Who else?」

「そのお告げは誰が？太宰じゃないよね。」

「それはないでしょう。

なにしろ Nigel は私が突然びっくりしているのにびっくりして、What's wrong、What's wrong って言っつて。私は決然と言っつたのよ、

Someday, at the right time, I'm gonna go to Kumano, but NOT with you.

If you really want good company, look for her around Shibuya or Shinjuku.

You're absolutely always good at getting off with a girl.

そして私は駆け出し、逃げたわ。

彼は追ってくることも、再び私の家に来ることもなかった。」

「きっとその紫陽花の根本からの声が今度は Nigel にも聞こえて、追っても無駄だっつて言われたんだろうよ。」

俺はそう言っつて、

「Stew いただこうかな」

と凜の手を取り、一緒にキッチンへ歩いて行っつた。

### <その26 第1部最終章>

結局その夜、俺は凜の家に泊まっつた。

俺は当代の大作家のように臆面なく「erao」のことを描写する気はない。

古代ギリシアでは4つの「愛」を区別しつたー

erao は性愛、phileo は何かを好む愛、agapao は敬愛、stergo は肉親や兄弟への愛と言っつていい。俺の凜に対して湧き上がる愛は stergo を除いてすべてだと言える気がしつた・・・

と言っつつつ、stergo も感じていたか？

俺は、朝凜が淹れてくれたコーヒーを飲みながら彼女が手入れする庭を眺めていて、はつきり凜に溺れているという自覚を持った。その庭には数株の紫陽花が今を盛りに咲いていた。

「私はこの地球の生態を守りたいって思っているわ、それもかなり強く。」

凜が俺の後ろに立って言った。

「Nigel の汎神論的な環境保護へのアプローチは間違っていない。もちろんこの科学技術一辺倒とも言える現代では、すべてのものに神性が、仏性が宿っているなんて言っても、カルト臭いとか、詩歌の世界でのことでしかないとか言われてほぼおしまいだけど。」

俺も凜も窓脇のソファに座った。

「ユウはブログで Shirley MacLaine のこと書いていたわね。彼女の、80年代に全米を驚かせた著作『Out on a Limb』と『Dancing in the Light』にある <God Force> -

彼女は、彼女のセミナーで『あなたを神とは思えない』って言ってきた参加者に、『If you don't see me as God, that's because you don't see yourself as God』とキツパリ言ったって。NigelはそのShirleyの信奉者だった。彼女は Irish American で、馬が合ったのね。俺も神、君も神、木も花も、鳥も獣もみんな神。そしておいらはおいらが神なる宇宙を夢見ている神—  
And I'm God who's dreaming of a universe where I'm God って。」

凜はスマートフォンで検索を始め、ページを見つけて、

「一方でね、太宰治は『渡り鳥』で、『近代音楽の墮落は、僕は、ベートーヴェンあたりからはじまっていると思うのです。音楽が人間の生活に向き合っただけで対決を迫るとは、邪道だと思うんです。音楽の本質は、あくまでも生活の伴奏であるべきだと思うんです』って、楽聖に向かって一刀両断するの。Mozart を称揚する一方でね。」

「ええ？」

俺は怪訝の声を上げた。

「小説の登場人物に言わせたとしても、太宰さんの考えだね、きっと。一体どの Beethoven の作品について言っているのか判然としないけれど。音楽が生活に向き合っただけで対決するのは邪道とは！生活の伴奏であるべきだとは、音楽は生活する主体に干渉するなってことか？あくまで生活者＝ソリストの演奏あつての彩りってことか？しかし、そのソリストが奏でているのは音楽じゃないのか！

まあ、何も小説の中の1セリフにギャアギャア言ったってしかたがないけど。それでもまた三鷹に行って、次元貴入部にお出まし願いたいな。<どういふ意味ですか>と訊きたいぜ。」

「それは措いておいてー」

と凜が言った。

「ユウは昔 Nobody wants to hear singers lecture って歌詞の歌、作ったでしょ。誰も歌うたいが講義するのなんか聴きたくはない、って。」

「う。そんなこともブログに書いた？しかもそんなところまで Hannah Lynn は読んだ！」

「ユウも、Nigel も、そして私も、<人間の生活に向き合って対決を迫る> 音楽を目指したし、目指しているじゃない？全てが全てではないにしろ。ユウの When There's No-One Left to Hear という反戦反核の歌とか。それが聴かれない、邪道だと言われてしまう向きは確実にあるのよ。その痛みを私はNigel と分かち合っただと思うの。」

俺はソファアの右側にいる凜を抱き寄せた。

「分かったよ。ありがとう。君と Nigel の関係性はもう十分に分かった。」

俺は彼女にキスをして、

「これからは、僕らの音楽だ」

と囁いた。

「一緒に<汎神論的 pro 環境保護音楽> を追求しよう、Hannah Lynn。」

凜はうっとりとした表情を俺に見せて、再び俺の唇を求めた。

< 第1部 完 >